
アルス国際製靴学校研修体験記

(平成20年9月22日～12月22日)

サラキ製靴 株式会社 皿井 美緒
有限会社 デコルテ 北原 未由季

9月24日から12月19日の3ヶ月間にわたりイタリア・ミラノにある、ARS国際靴学校での研修を終えて、靴に関する技術や知識をさらに深めるとともに、海外で生活をし、世界各国の人々と一緒に授業を受け、様々な国の文化に触れられ、とても貴重な体験をさせていただきました。

【研修内容】

ARS国際靴学校には、靴のコースと鞆のコースがあり、私たちは3ヶ月間の靴の紙型のコースでした。

私たちの滞在中には、他の短期のコースが絶えずあり、クラス以外の様々な人とも交流することができました。

私たちのクラスは、イタリア・アメリカ・メキシコ・カナダ・ロシア・ボリビア・ウルグアイ・オーストリア・デンマークからの17人でした。ほとんどの人が初めて靴を学びにきていたので、授業の進むペースはゆっくりでしたが、その分何度も繰り返し練習することができました。また、皆とても個性が強く、様々な面で影響を受けました。先生方は3名で、内1名の先生が常に私たちのクラスを担当し、授業は2名、もしくは1名の先生によって進められました。



写真① 授業風景



写真② Paolo先生／皿井研修生／Richard先生

授業は、イタリア語と英語を使い、始めに先生が実際に紙型を切りながら説明し、そこまでの作業の一貫をコピーしてくれ、それを元に、各自同じことを繰り返す、という内容のものでした。

わからないことがあれば質問などをし、出来上がった物を先生に見てもらい、必要があれば提出しました。

やはり、同じルナティシステムを使っても、先生によって説明が異なることもあり、初めは混乱しましたが、紙型を切る上で、皆全く同じと言うことはなく、多くの人のやり方を見て、自分で試し、自分に合うやり方を選んでいかなければならないのだと思いました。

私たちの受けたコースは、3ヶ月間で一通りのデザインの紙型を習得するというものでしたので、朝から夕方まで日々反復練習でした。

木型の原型を取ることから始まり、パンプス・外羽根・内羽根・サンダル・ローファー・サボ・アンクルブーツ・ロングブーツ・スニーカー・アシメトリースタイル・袋モカ等を順に学びました。

クラシックなデザインを何点か練習した後、応用されたデザインも学ぶので、様々なデザインに対応できるようになります。

紙型は全て数値化されており、原型上で数式によって求めた位置や、あらかじめ決められた位置に切り込みを入れ、それによって、ある部分をつめたり、開いたりして、いかに木型にフィットし、釣り込みがしやすいよう設定されていました。

そのため、全ての数値や数式を暗記すれば誰でも、クラシックデザインの紙型を切ることができます。しかし、やはり全ての木型や、全てのデザインに対応するものではないので、様々なタイプの木型やデザインで試しながら、日々学び続ける必要があると実感しました。

デザイン画に関しても、誰でも簡単に靴の形が取れるよう、基本となる数値が定められていました。しかし、デザイン画のた

めの授業はほとんどなく、各自余った時間や、授業後に描いて、先生に見てもらっていました。

10月に入るところから、普段の授業の合間に1～2時間程、理論の授業がありました。木型や革に関する事など、靴全般の講義でした。

課外授業では、LINEA PELLE、L. P. Fashion studioでのAlberta Ferrettiの講演会、Salvatore Ferragamoの80周年記念展鑑賞、STEFANIAのタンナー見学、婦人メーカーのROVEDAでシャネルの製靴工程見学、ポリウレタン工場の見学をしました。

課外授業に向け、事前に理論の授業の中で見学先に関する知識を学び、その後実際に自分の目で見たり、触れたり、担当の方の話を聞いたりして、授業の内容がより明確なものになりました。



写真③ Linea Pelle会場

11月初めには、各自のプロジェクトが始まり、デザインから紙型、革の裁断までを先生に相談しながら進め、最終的に木型に釣り込むところまで仕上げました。同時に子供靴のコンテストの企画も始まり、こちらはデザインから底付けまで仕上げました。そして、審査の結果、北原研修生のデ

デザインした子供靴が1位に選ばれ優秀な成績を修めました。

残りの1ヶ月は覚えることも多く、各自のプロジェクトを進めながらの授業でしたので、授業後も1～2時間程度残って作業したり、先生に質問したりと大変でした。しかし、これまでの授業では紙アッパーまでの制作でしたが、今回は初めて自分がデザインしたものが実際に革アッパーとして出来上がるということだったので、とても興味深く、充実した日々となりました。

卒業試験は、最終の2日間で行われましたが、その週は授業というよりも、わからないところを先生に質問したり、試験日に提出するものを作成したりと、卒業試験に向けての準備と最終確認の期間でした。

試験も想像していた程難しいものではありませんでした。先生にいくつか質問をされましたが、答えられなくてもヒントをくれたり、詳しく説明してくれたり、試験というよりは最後の授業という感じがしました。

【ミラノでの生活】

ミラノでの生活ですが、3ヶ月の生活ベースは、ARS国際靴学校と同じ建物内にあるレジデンスの一部屋でした。

部屋は想像していた以上に綺麗で広く、オレンジ色を基調とした壁紙には絵画も飾ってあり、部屋に入った瞬間からこの部屋が気に入ってしまいました。2人部屋にはキッチン、バス、トイレ、TV、電話、ベッドが2つ、食事用の大きなテーブルとイス以外に、ソファと小さなデスクも付いていました。収納も沢山あり、キッチンには食器や調理器具なども揃っていて、3ヶ月の生活をしていく上で、不自由する事も特になく、大変快適な生活を送る事ができました。また週に2回のタオル交換と、週1回

の掃除、ベッドメイキングのおかげで、掃除の心配もなく、集中して勉強ができました。

私たちのクラスは女性がほとんどで、クラスメイトの半数がこのレジデンス内で生活していた為、授業以外の時間にも、お互いの母国料理を教えあって一緒に作ったり、時にはバースディパーティーやクリスマスパーティーをしたりと、情報交換や交流の場としてもレジデンスは活躍しました。



写真④ クラスメイトとの交流

また物価ですが、私たちが渡欧した際、1ユーロが160円台だった事もあり、物価は大変高いと感じました。しかしその後世界恐慌の影響で、110円台まで下がってからは、日本と差ほど変わらないと感じましたが、為替レートもまめにチェックして、両替や銀行からの引き落としの時期やタイミングを計る事も大事だという事も学びました。レジデンスから歩いて15分くらいの場所にあるチャイナタウンへ行く事も多かったです。イタリアの物価と比べると大変安価な中華レストランやアジアマーケットがあったため、頻繁に利用していました。

レジデンスから歩いて5分ほどの場所に、トラムと呼ばれる路面電車の駅があり

ます。ここから乗れるトラムは、ドゥオモという街の中心地にあり、ミラノを代表する大きな教会がある広場まで行く電車や、カドルナ駅という大きな駅を通過する電車など、2～3本ほどの路線を走る電車が乗り入れます。初めはチケットの買い方や乗り継ぎの仕方が分からず、徒歩や、乗り継ぎが簡単な地下鉄で行動する事が多かったのですが、慣れるにしたがって便利になっていきました。

ミラノの街には何世紀も前の建物や歴史的建造物が、今もそのまま残っています。街を歩けば本や雑誌でしか観た事がなかったヨーロッパ独特のゴシック建築やバロック様式の建物を簡単に目にする事が出来、モダン建築とともにミラノの街に馴染み、溶け込んでいます。他方でミラノは、イタリア経済の中心都市であり、また最新ファッション・デザインをリードしている最先端の都市として知られているだけあり、老若男女それぞれが個性を活かしたオシャレを楽しんでいた様に見受けられました。それは年代や性別、スタイルやプロポーションなど関係なく、個々の感性を個々のスタイルで表現している様に感じました。また、人だけでなく、一流ブランドから無名ブランドまで、各店それぞれが個性を活かし、飾ったショーウインドウなどにも見える事でした。

これらの、歴史的建造物の見学、ウインドウショッピングでの市場視察、展示会場や街行く人々のファッションやスタイルを

通して、今年の流行の傾向やデザインのインスピレーションが沸いたり、日本ではなかなか出来ない貴重な体験を沢山する事が出来ました。

【研修を終えて】

研修を終え、3ヶ月という期間ではありましたが、靴・ファッションの先進国イタリアにて、ルナティーシステムという特別であり画期的な型紙のおこし方、また一流の機材が揃った一流の靴メーカー見学、世界屈指の皮革展示会見学など、私たちが見て・触れて・感じた事、また知識や技術の向上だけではなく、培った感性・経験は私たち自身の財産に、そしてそれぞれの会社への貢献に必ずつなげていかなければならないと考えております。また会社業務だけにとどまる事なく、お客様や一般のお客様を通して、靴産業や市場への貢献にもつなげていける様、この3ヶ月間で身につけた技術や知識にさらに磨きをかけ、幅広い視野を持つ業界人として活躍していきたいと考えております。

今回この研修で私たちのお力になって下さった関係者の皆様、また業界関係者の方々のご期待にお応えできるよう、これからも日々精進していきたいと思っております。

最後になりましたが、このような貴重な体験をさせていただき、大変ありがとうございました。この場をお借りして、関係者の皆様には厚く御礼を申し上げます。